

モルトマンの歴史理解

——希望の神学と現代世界の問題——

笠井 恵 二

本稿において私は、現代のキリスト教世界において指導的立場に立つモルトマンが、歴史というものをどのようなように理解し、現代の世界と地球の問題に関して、どのような思索をなし、いかなる発言をなしているのかを見ていきたいと思う。

一、生涯

まず簡単にモルトマンの生涯をおってみよう。彼は一九二六年に北ドイツ・ハンブルクのプロテスタントでリベラルな家庭に生まれた。聖書よりもレッシング、ゲーテ、ニーチェに親しみつつ成長した彼は、十六歳の頃には数学と原子物理学を勉強したいと思っっている若者だった。教会にも滅多に行ったことはなく、聖書にも信仰問答にも疎遠で成長していったのであり、このようなことは、ドイツの神学者としてはめずらしい。第二次大戦が始まり、一九四三年十七歳のときに徴集を受けるが、まもなく自分の住むハンブルク市が炎上するという悲惨な体験をする。四四年には

前線に出るが、翌年捕虜となる。ここでの三年間の収容所の生活において、彼のうちで生の確かさが崩壊した。この体験のなかで、彼はキリスト教信仰における新しい生の「希望」を経験する。この「希望」こそが、彼を絶望と自棄から救ってくれたものであり、精神的にも肉体的にも生き延びることを可能にさせたものだった。つまりモルトマンにとっては十九歳から二十二歳にかけてのこのベルギーとスコットランドでの収容所の体験が、人生を百八十度方向転換させたものであり、彼の神学の根本理念である「希望」という理念もここで培われたものなのである。四八年に故国に帰還した時、彼はすでにキリスト者となっていた。それも自分の命を保持することを可能にした「希望」というものの力を知的に捉えるために、神学を学ぶという目標をもって帰郷したのである。だから彼の神学は、ドイツ人である彼の世代の罪責と苦難の集団的経験のなかに土台をおいているものなのである。

帰郷後、彼はゲッティンゲン大学に入学し、とくにH・J・イーヴァント、E・ヴォルフ、O・ヴェーバーから学んだ。その後、ブレイメンの田舎の教会で五年間牧会をし、五八年から大学で教えるようになる。しかし彼は、大学教授でありつつも人々に説教し、助言し、慰める牧師であり続けた。彼にとっては、あらゆる時代に通用する神学的教説よりも今ここに具体的に当てはまる言葉の方が、また純粹な理論よりも実践的な教えの方が大切なのであった。彼には、神学部の同僚たちがやっているように、教会で説教することと大学での講義・研究をはっきりと分離させることができなかったのである。

またモルトマンにとっては、神学という学問と政治的活動という実践を分離することも不可能なことである。「……自分の国の政府によって悪に加担させられたばかりか、さらに戦争の無意味な死へと追いやられたわたしの世代のような人間にとっては、非政治的な学問性といった象牙の塔に十分な安らぎを見いだすことは出来ないのであ

る。神学の政治的制約と政治的責任とは、ゲッティンゲンにいた最初の頃からわたしの自覚のうちにあった¹⁾。モルトマンがこのような意識をもつに至ったことには、神学生との頃に出会った夫人の影響も大きい。夫人はポツダムの告白教会に属する教会の出身で、モルトマンよりも政治的抵抗ということに馴染んでいた女性だった。

このような特色をもつのがモルトマンの神学であるが、彼は一九八五年に自分の神学の方法を三つの観点からまとめている。第一の方法は「一つの焦点をもった神学の全体」ということで、この方法を彼は『希望の神学』（一九六四）、『十字架につけられた神』（一九七二）、『聖霊の力における教会』（一九七五）で用いている。

第二は「運動、対話、闘争における神学」の方法で、彼は一九六五年のザルツブルク、六六年のヘレンヒムゼー、六七年のマリエンバートで、カトリックの神学者たちと共にマルクス主義者との対話をなしている。この六〇年代の対話において彼がもくろんだことは、教会政治とキリスト者の政治を「キリスト教化」することだった。この政治神学はヨーロッパという地域をこえ、第三世界の「革命の神学」「解放の神学」「民衆の神学」と相互交流をなすに至った。社会主義と自立と人権のためにキリスト者を動員し、地域の状況と結びついた政治神学が生まれたのである。また彼はユダヤ教とのエキクメニカルな対話も推進してきたし、さらには「黒人神学」、「女性解放の神学」にも深い理解を示している。

第三の神学的方法は、「全体への寄与としての部分」である。彼は、神学への体系的寄与というシリーズを企画し、特定の体系的順序に従って、神学における重要な概念と教理の関わりを扱っている。これによって彼は、教理学を目標とするのではなくより大きな対話に参加しようとの意志を明らかにしている。これは、第一巻『三位一体と神の国——神論』（一九八〇）、第二巻『創造における神——生態論的創造論』（一九八五）、第三巻『イエス・キリストの道——

メシア的次元におけるキリスト論』（一九九三）において結実したが、この後『生の御霊——総体的聖霊論』、『終末論』、『キリスト教神学の基礎と方法』が予定されている。

二、希望の神学

モルトマンは一九六三年三十八歳のときに『希望の神学——キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究』を發表して、一躍世界的な神学者となった。彼にとって、終末論というものはキリスト教の教えの一部分ではなく、キリスト者の実存と宣教の性格は、終末論的に方向づけられている。だからキリスト教的神学には、その対象によって設定され、それによって人類と人間の思惟の課題とされているもの、すなわち未来の問題があるのみなのである。聖書的な希望の契約として人間に出会うものは、新しいものへの約束として、神からの未来への希望として出会うものである。モルトマンにとって、神はなによりも「希望の神」であり、「存在の特性としての未来」をもつ神なのである。だから、彼にとって神はどこか彼岸に在るのでなく、常に來たるべき者として現在の存在なのである。

モルトマンはキリストの復活をとくに強調する。キリストの復活は、世界・実存・歴史に新しい可能性をもたらす。キリストの復活は「新しい創造」として理解されるべきものである。また復活が終末論的に理解されることによって、歴史についての独自の理解がなされる。キリストの復活は、人間が知っている歴史において平行するものはないが、それゆえにこそ「歴史を設定する出来事」と見做され、そこから他の歴史が照らされ、問い直され、変革される。だから、この唯一回の出来事を想起することにおいて、全世界の事象の未来への希望が想起される。キリス

トの復活が歴史的と呼ばれるべきなのは、それが未来の出来事に道をさし示し、人がそこにおいて生きるべき歴史を形成するからなのである。未来の意味についてモルトマンは次のように語る。

今日の時を歴史の過去の時と結びつけるものは、「歴史的」理解が問題であるかぎり、共通の同質性の核でもないし人間実存一般の普遍的歴史性でもなく、未来の問題である。それぞれの現在の意味は、ただ未来の希望の光においてのみ明らかになる。それゆえ歴史のための「歴史観」理解は、単に事実に出来事のつながりや法則性を解明しようとするだけではなく、また単に過去の実存可能性を発見し、それを可能なかぎり繰り返そうとするだけではなく、過去の現実の中に、そこに潜む可能性を問うであろう。未だ生まれていない未来が過去の中に横たわっている。成就された過去は未来によって待望されうる。……われわれが歴史的諸現象を、それらに固有な歴史性において認識するのは、ただわれわれが「それらの」未来に対する意味を認識する時においてのみである。それに従って初めて、われわれの未来に対する歴史的諸現象の意味が認識され、また、それらの未来に対するわれわれの意味が認識されるのである。

こうしてモルトマンによればキリスト教的な未来への希望は、イエス・キリストの復活と顕現という唯一回的な出来事を認識することから生まれるわけである。キリストの復活を認識するということは、この出来事の中に神の未来と、神の業において見出しうる人間の未来とを認識するということである。だからキリスト教的な歴史意識というのは、神の歴史的な計画に関して、神秘的な知識をもって何千年もの歴史的宇宙を意識するというようなことではな

い。それはむしろ神的な委託を認識する使命の意識、この顧われない世界の意識、またキリスト教的使命やキリスト教的希望がそこに立っている十字架の徴しについての意識である。

三、生態論的創造論

モルトマンは、一九八五年に、現代世界の環境破壊などの新しい問題と本格的に取り組んだ『創造における神——生態論的創造論——』を発表している。その中で彼は言う。今日、これまで全く知られていなかった新しい問題が出現してきている。すなわち、創造者なる神、および創造としての世界への信仰は、産業による自然の開発と破壊に対して何を意味するのか。「環境の危機」は、同時に人間自身の危機でもある。それは、この地球惑星に住む生命全体の危機であり、今や地球上の被造世界の生死をめぐる闘いが開始したのである。だから、今日における神論の問題は創造の認識にある。ヒトラーと闘った時代、三位一体の神を認識することが教会を信仰の確かさへと導いた。今日では、聖霊によって被造世界に臨在する神を認識することこそ、人間を自然との和解と平和に導いていくのである。現代において、神学の領域を全被造世界にまで拡げていくことは、ヒトラーの時代に神学が「キリスト論的集中」に傾注したことに対応すべきものである。

このようなことを序文で述べているということ、モルトマンの神学的営為の出発点が第二次大戦の悲惨な体験にあったことが分かる。モルトマンは、今や神学は神の創造への信仰にふさわしい知恵を見出そうとするなら、今日の人間中心的世界観から自由にならなければならないと言う。創造への信仰は、これまで人間の歴史が過大に評価され

たことから解放されなければならない。つまり自然の歴史がもっと注目されねばならない。すなわち、その上で人間の歴史が生じるところの大地なる自然への展望が大切なのである。さらに、人間の歴史を時間的にも空間的にも超越して持続している神の創造への展望が重要である。このような壮大なスケールでモルトマンは、神学と自然科学の關係の歴史を三つの段階に区別していく。

第一は、聖書の伝統と古代の世界像が宗教的宇宙論へと融合していった段階である。ここでは、被造の世界に対する創造者の超越という表象が、時間的・空間的に限定された偶然的・内在的世界という宇宙論的表象を生んだ。しかし知恵によって導かれる秩序ある神の世界として、超越的創造者の靈が被造的世界に内在する世界が出現した。そして中世の宇宙論はプロトレマイオスの世界像を土台とする、六日間の神の業の宇宙論的解釈だった。

第二は、自然科学がこのような宇宙論から解放され、神学は創造論を宇宙論から奪回し、創造論を個人的創造信仰に還元した近世における段階である。この段階では、古代と中世の世界像は非科学的なものとして否定され、聖書の創造物語は史的批判により神話として排除され、かくして創造論は個人的信仰に還元された。そして自然科学と神学は、互の境界を明確にすることに腐心した。ブルーノおよびガリレイの裁判、またダーウィンやフロイトをめぐる論争がなされ、境界線が明確にされ、両者の間に平和的共存がもたらされた。

しかしモルトマンによれば今や、神学と自然科学の關係は第三の段階に到達した。両者が今なすべきことは、生態論的危機に直面して、従来の方向を転換させることである。今や、従来の科学に対する無条件的な信頼は自然科学から失われており、神学者は自然科学に対する永続的な境界設定が必要でなくなっていることを感じている。自然科学者たちも、神学は古びた世界像を保持しようとしているのではなく、宇宙論においても、社会的実践においても、真

剣に対処すべき相手であることを感じ始めている。今や、世界はひとつになるか、それとも絶滅するかという状況におかれており、自然科学と神学は手をとり合って生態論的世界意識をもたなければならぬのである。

たしかに、現在の世界が否応なしにこの第三の段階に入った、というモルトマンの指摘は正しい。人類は、これまで経験したことのないような段階にまで「進歩」してきているのである。今やこの自然的世界との共存ということ、何よりも優先課題として神学的営為も遂行されねばならない時代なのである。またキリスト教倫理学は、無制限に突っ走り続ける科学技術にブレーキをかける役目を果たす義務がある。

モルトマンは、近代においてその世界象徴である歴史が、「進歩」という理念によって解釈されていたことを指摘する。しかし、人類が前進しつづけているという近代の世界象徴には今日、限界が見えてきており、歴史の構想そのものがさらに巨大な自然の構想の中へと統合されなければならない。モルトマンは、人類の時間と生態系「地球」の自然的な時間とを共時化(Synchronisierung)することによって、歴史の限界を指摘していく。ここにおいて大切なことは、このふたつの時間が質的には浸透し合いつつ、量的には簡単に切り離すことのできない相互内在的な性格をもっていることを理解することである。

モルトマンは、今日人類が滅び去ることのないために実現されるべき課題を示す。それは、人間がこれまで生きて来た様々の歴史的時代の共時化である。以前はそれぞれの民族がそれぞれの複数の歴史をもっていた。一つの「世界史」というものは存在しなかった。この地球上には、様々の人間の歴史が存在していたのであり、「一つの世界史」というものについて語られたときには、常に総括的支配への要求が結びついていた。この理念は、自分とは別の世界を支配しようとする一つの民族、一つの文化、一つの宗教の帝国主義的手段だった。しかし今日においては、人類が

自己破壊する危険性の増大によって、歴史の単数的主体が成立し始めている。核兵器の脅威により「一つの世界か世界の絶滅か」という二者択一に直面している人類は、独特な文化の入り口に立っていると見える。人類は、過去と伝統を複数で持っているが、希望と将来は単数で持っている。一つの共通の将来のみが存在するのであり、平和によってのみ生き残ることが可能なのである。世界の平和というものが、人類が生き残るための基本的な条件なのである。

超大国の核兵器による相互絶滅の危険を回避するために人類の連合が必要であるが、未だその可能性は示されていない。この危険性からの救いは、生命を希望する交わりと平和的な世界を建設するため意志を連帯させること以外にはない。この希望において高められる意志の力によって、さらに緊密な相互の結びつきが国家間に生まれなければならない。いつの日にか人類が連帯をもち、自身で歴史の主体となり、自分の将来を決定しうるために、より高い段階での交流の形式が形成されなければならないのである。

こうしてモルトマンは、今や人間は自分たち固有の歴史内での思考から、人類共同体において自分たちの歴史を考慮することへと、すなわち部分的思考から普遍的思考へと移行すべきであると言う。今日、キリスト者は世界教會的な交わりにいかなる貢献をなしうるかを考えなければならぬ。分派的思考は自己の部分全体とみなすが、世界教會的思考は、自己を到来すべき交わりの一部とみなす。キリスト者が世界教會的交わりにおいてなすべきことは、模範として、諸宗教と諸文化の世界教會的交わり、および世界の生態論的・政治的居住可能性にも影響を及ぼしていくことなのである。

モルトマンはさらに、歴史的時間と自然的時間の共時化の必要性を強調する。近代において実験というものが始まってから、歴史と自然は対立するものとされてきた。こうして人間は自然については静止、回帰、循環の印象をも

ち、歴史に対しては時間、変化、偶然、そして可能なものの経験を保持していた。自然は没歴史的に理解され、歴史は没自然的に理解されていた。F・ベークン（一五六一—一六二六）以後、人間は自然を奴隷のようなものとして見てきた。そして人間が歴史を創造していくことは、自然を枯渇させることとなった。しかし、人間と地球が破局することを免れるには、人間の歴史が自然の歴史と共時化され、近代の実験が自然を犠牲にすることなく為される以外にない。人間社会と自然環境が共に生きつづけるためには、人間社会の一面的な進歩の速度を緩めなければならぬ。「人間社会の時代構想は、環境と人間の身体性における自然の生命法則やリズムと媒介されねばならない。このことが特に必要なのは、ある集団の進歩が人類の他の集団の犠牲によって存在しているという事実³に直面しているからである。技術的進歩が自然とか後の世代の犠牲によって促進されるならば、それは見せかけの虚構の進歩にすぎない。われわれは、歴史の進歩過程の限界をわきまえ耐えうるものとするために、ますます均衡のとれたシステムを必要としている。」かくしてモルトマンによれば、人間の歴史にとって大切な倫理的限界を明らかにするためには、人間の歴史の自然的限界を明確にすることが必要である。人間の歴史は、より包括的な生態系である地球の上でなされている。太陽エネルギーの無限の供給、大気と水の循環、四季、月の運行と昼夜の規則的な交代というものが人間をとりまく自然環境である。しかも、人間の歴史によって危機に瀕しているこの生態系「地球」といえども、生態系「太陽」その他のものの部分的な体系にすぎない。星空の無限の空間を仰ぎ見るなら、人間の歴史も地球という一つの小さな惑星の上での生命の進化におけるささやかで限られた現象へと自己を相対化するのである。

宇宙的規模で世界を見ることと人類の過去を見ることが、現在の歴史の限界を人間に認識させる。人間が「創造の王冠」とされ、世界の中心とされ、すべては人間のために創造され、人間が利用するために存在しているという人間

中心主義が、新しい宇宙論的神中心主義と交換されるなら、人間は歴史を望ましい人間的・自然的基準に導いていくことができる。自然界にある被造物が人間のために存在しているのではなく、人間が神の栄光のために存在しているのである。「人間は、生の意味を行為と制作ではなく、生きていることに對する喜びの中に見出せば見出すほど、人間の経済的・社会的・政治的歴史を、よりよく自然の限界内に保つことができるだろう。」³⁴

またモルトマンは言う。近代の哲学的・神学的人間学は、人間と動物の違い、および宇宙の中での人間の特別の位置についての問いから始まった。しかし今や人間は、人間を他の被造物と結びつけるものは何であり、共通するものは何かを問わねばならない。西洋近代の人間学においては、人間は世界の中心であり、人間が用いるために世界が造られたという人間中心の世界像が前提されていた。しかし近代の科学によって、この単純な人間中心主義は解体されたのである。近代の天文学が、プロレマイオスの世界像を乗り越えた結果、無限の宇宙空間と無数の星を見て、人間はこの地上において何ものなのかということが問いとなった。近代の生物学においては種としての人間が、発生し消滅していく一連の種の進化に還元された。また近代の精神分析においては、理性と意志をもつ人間の自我意識の下に、無意識の世界があることが示されたのである。中世においてプロレマイオスの世界像が受容され、人間が世界の中心点とされた時、キリスト教の人間学は聖書の伝統の基礎を退けてしまった。近代において聖書の伝統が、人間を創造の交わりを洞察させるためではなく、宇宙における人間の特別の位置を認めることのみに関係させた時、キリスト教的人間学は一面的なものとなった。そしてキリスト教的人間学が人間の尊厳と倫理性を守ろうとして、ガリレイ、ダーウイン、フロイトに反対し近代の人間中心主義を擁護しようとした時、それは偏狭かつ不毛なものとなった。人間というものを包括的に理解するためには、人間が生きている環境を知らなければならない。つまり、人間が

宇宙で特別の位置をもち、神の似姿性をもっているというようなことからではなく、「宇宙の発生」、「生命の進化」、「意識の歴史」ということから始められるべきである。こうしてモルトマンは、人間を「創造の交わりの中にある被造物」として語っていく。神の像として理解する前に、「世界の像」(imago mundi)として、ここにおいて被造物すべてが再発見され、全被造物との交わりにおいてのみ存在し自己理解する小宇宙 (Mikrokosmos) として、人間を理解していくのである。

さらにモルトマンは、「創造の歴史」と「救済の歴史」のふたつの歴史を見る。創造の歴史の順序に従えば、天地の創造が初めにあり、最後に人間が安息日の前に創造されるが、救済の歴史の順序に従えば、新しい人間の創造が最初であり、天と地の新しい創造が最後におかれる。つまり、救済である新しい創造は、イエス・キリストの派遣、献身、甦り、と共に始まるのである。これの例としてモルトマンは、ローマ八・一九以下、八・二九、第二コリント五・一七、黙示録二一・一、五を引用する。聖書の伝承によれば、救済の歴史は創造の歴史とは順序が逆になっている。創造においても救済においても、人間は孤立してもおらず、また世界との対立において見られるのでもなく、全被造的世界との継続において見られている。人間にとって全被造的世界は意味をもっているものであり、また全被造的世界は人間にとって意味をもっている。人間の存在と使命を理解するためには、神の歴史の世界、すなわち創造と救済の包括的関連において人間が理解されなければならないのである。

だから、人間は最後の被造物として、すべての他の被造物を体現している。人間は世界の像であり、小宇宙として大宇宙を代表しており、すべての他の被造物の代理として神の前に立っている。人間は、他の被造物のために生き、語り、行為するのであり、祭司的被造物、聖餐的存在である。人間は神の前で創造の交わりを執りなすのである。か

くしてモルトマンは次のような壮大な歴史観を語る。

われわれは、栄光の国においても、時間と歴史、未来と可能性を、何ひとつ邪魔されないほどに、もはや両義的でない仕方では仮定してよいであろう。だから、われわれは、没時間の永遠の代わりに「永遠の歴史」について、「歴史の終り」の代りに前史の終りについて、そして神と人間と自然の「永遠の歴史」の始まりについて語るべきであらう。その時われわれは、過ぎ去ることのない変化、過去のない時間と死のない生命を考えざるをえない。⁵⁾

四、メシア的次元におけるキリスト論

モルトマンは、一九八九年の『イエス・キリストの道——メシア的次元におけるキリスト論』において、急速に発達し矛盾にみちた現代の技術文明の世界におけるキリストの意味について特に三つの問いを發している。

まず、北大西洋世界の歴史では経済的・政治的に發展をみたが、その背後に、第三世界においてだけでなく、第一世界の国民にも「新しい貧困」が発生した。技術的進歩というものは資本家には有利なものだったが、労働者にとつてはそうではなかった。経済の生産力が増すにつれ、就職難はむしろ増大した。限界をこえた貧困層が生まれ、その人々は生涯仕事を得ることができず、豊かさにあずかることなく、余分な人間と見做される。このような矛盾が技術的發展の構造、および市場の構造の中に潜んでいる。このような余分な者となった人々にとってキリストは誰なのか、とモルトマンは問う。

次に、技術文明は進歩と同時に核への恐怖をもたらした。核兵器の所有は、巨大な権力像を約束し、国民に全能の夢をもたらした。核による世界支配をめぐる戦いが始まった。核の力を建設することによって、技術文明はその終りの時に到達した。それは、地球上のすべての生物の終極を、いつでも遂行できる最後の時である。今や全人類が共に核による破滅に脅かされており、否定的にはあるが、共通の世界歴史が生れている。この死の危険にさらされている今、人類が共に生き残るためには、集団的な行動を起こす主体となることが大切である。ともかくも、起こりうる危険性に対して安全のためのパートナーシップをとるという形態で国際的なネットワークが生れている。この核の恐怖の体系から逃がれるには、いかに体系を転換させることが必要なのか。教会は、信仰のゆえに、技術文明のこのような終末の産物に反対し、平和と生命に奉仕するため告白しなければならない。このような核の脅威の下にいるわれわれにとって、キリストは誰なのか。

第三にモルトマンによれば、技術文明の発展に伴って「エコロジ的危機」が生じた。増大する環境破壊、動植物の種の絶滅、再生しえないエネルギーの浪費、有毒廃棄物や排気ガスなどによる土地・水・空気の汚染などである。こういうエコロジ的危機は自然に対して人間が支配権を得ようとしたことに由来するのであり、技術文明の自己矛盾である。この自然環境に出現している危機は、近代の支配体系そのものの危機なのである。人間は技術によって自然を抑圧し、自分のためにこれを利用する。自然科学は、自然を抑圧し支配するための知識を提供するものとなってしまう。このような科学と技術がもたらす社会の基本的な価値は、権力獲得や利益追及ということである。現代の産業社会は、常に成長と拡張を旨ざしており、その成果は自然を犠牲にすることによって獲得されたものである。長い目でみると、技術文明がこれ以上進むと、さらなる環境破壊に突き進み、その結果は宇宙のエコロジ的死

と地球体系の壊滅である。これをモルトマンは、キリスト教神学の第三の大きな挑戦と考える。このような滅びつつある自然と今日の人間にとって、そもそもキリストとは誰なのか、と彼は問う。

キリスト教会と神学のこれら三つの挑戦に対してモルトマンは、救済論の見地からキリスト論を展開する。現代文明の三つの矛盾と関わって生きる人間は、人格的問題も考慮しなくてはならない。政治的次元は、現代のイエス論の人格的次元を含んでおり、そして古代教会のキリスト論の宇宙論的次元をエコロジーという面で受容する。それはもう「キリスト教世界」に対応したキリスト論ではありえず、世界の危機と矛盾の中にあるキリスト論であるべきなのである。

キリストの終末論的復活の本質を見きわめるために、彼はまず初代キリスト教の復活信仰の発生の歴史を考察し、その復活信仰を分析する。次に近代的・史学的方法を展望し、その復活信仰を考察し、歴史と復活の近代的問いを明らかにする。最後に人間によってつくられ経験される歴史を、キリストの復活の光りの中で探究していく。これまでの神学の営みは、復活と歴史とを共通の分母にしていたが、モルトマンは解放の歴史の根拠・目標・実践として、十字架につけられた方の復活を展開していく。「歴史」はヨーロッパ近代のパラダイム（枠組）であったが、人類究極のパラダイムではない。地球の上には発生しつつあるエコロジーの問題は、「歴史」というパラダイムをはぎとってしまう。この挑戦に対してモルトマンは、自然の枠内でキリストの復活の可能性と意味を問い、さらにはキリストの復活の枠内で自然の将来を問うていく。古代教会のキリストの神性と人性の両性論は、近代以後のエコロジカルなパラダイムの中で受容され、新しく解釈されねばならないのである。

またモルトマンによれば、キリストの復活を展望して歴史を見る時、歴史の終りと世界の新しい創造を問う終末論

的な問いが起こってくる。神の国が近づいたとのイエスの宣教は、終末論的宣教であり、将来的確証が土台だった。死人の復活の象徴には「歴史の終り」が前提されているから、使徒たちが「死人の中からの甦り」として宣教したも
のには、神の国の先取りの終末論的な確かさが含まれていた。そしてイエスの甦りにおいて、「歴史の終り」が歴史
の直中に現在したことによって、普遍史の理解が可能となり、それがキリスト教的に必至なものとなった。イエスが
甦ったとの判断は、実証主義的な歴史学において確かめられることではないが、歴史の終りを望み見、普遍史的考察
の枠内で確かめることはできるのである。キリスト教の復活の神学は、「真の世界史の哲学」(die wahre Philosophie
der Weltgeschichte) たる要求をなすべきなのである。

イスラエルの「歴史経験」は、約束への信仰によって開かれたものであるが、神学的に開かれた歴史としての現実
の経験は、アブラハムの故郷からの出発から始まっている。アブラハムは、神の招きに従い、旅に出て、歴史として
の現実を認めた。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教という三つのアブラハムに由来する宗教は、将来を旨ざす歴史
宗教である。この特徴は、自然を重視する道教、社会を重視する儒教、自己の魂を重視する仏教と比較すると明瞭で
ある。歴史的宗教においては、現実が神の約束によって開示される歴史として理解される。そこで約束された事柄
は、約束する神御自身の現臨であるが故に、つねに新しい希望の再生に向かう。このような期待において、人間と自
然の世界内での出来事は時間的なものとなり、この時間の中で歴史的に経験される。それは閉じられた出来事ではな
く、それ自体を越えてなにごとかを指し示す。個々の出来事は、それ自体では意味をもたず、約束の歴史の目標と関連
して初めて意味をもつ。しかも語られた約束の言葉だけでなく、過去に経験した出来事も、将来を指し示すのである。
聖書の歴史においても、将来は過去の約束であり、過ぎ去ったことは忘れ去られてはならないとされているのである。

またモルトマンによれば、死人の復活の象徴は、歴史的将来の希望を表現している。歴史的に期待される「終末の日」は「主の日」でもあり、その日自体は永遠で、すべての過去の時に対して同時的である。死人の甦りは、この死の歴史の時の終りと、もはや死のない新しい創造の永遠の始まりを結合する。だから死者を想起することによって過去に対する希望の火を燃え立たせることが可能である。歴史においては、「死」ではなく「神の義」が最後の言葉なのである。かくして過ぎ去った死者についてモルトマンは次のように語る。

……そのことが終末論的に真実であるなら、歴史的にもまた何ものも失われることなく、すべては「再建」される。このような期待の地平において、すでに「想起としての歴史」はある種の「死者の再起」へと導く。すべての過去は、死人をよみがえらせる将来の光の中にある。うしろを振り返って死人を想起する人間は、いわばその背中に「最後のラッパ」の響きをもっている。現在を過去の時にできるかぎり拡げていく努力をするだけなら、「普遍史」は、欠けたものになる。その真の動機は、死者の終末論的希望なのである。

モルトマンによればこのような終末論的期待から、具体的な期待の地平が現われてくる。そこにおいてはもはや死者の将来は問われない。むしろ、過ぎ去ったものが生きる命の将来が問題にされる。すべて現在に、過ぎ去った者が将来に対して抱いた希望から起こってきている。過去を見ることにおいて、過ぎ去った展望が認識され現在化されなければならぬ。その時、過ぎ去った者たちのさまざまの希望が、現在の人々の希望によって媒介され、将来への計画のうちにとり入れられる。対象に適った史的研究は、過去における将来を問うのである。「私たちが『歴史的』現

在と名づけているものは、現在ある将来である。「歴史」は、このような理解によれば、それが人間個人であれ、人間社会・民族・人類全体、もしくは人間文化と地球の自然との間の関係であれ、将来についての歴史である。」⁷⁾

さらにモルトマンは、歴史を復活の展望において見ることは、御霊にあって復活のプロセスに参与することを意味すると言う。復活を信ずるということは、一つの教理に同意したり、一つの史的事実を認めることだけでなく、神の創造者の行為に与かることなのである。復活信仰とは、人間を立ち上げさせ、命の将来を見つめることによって死の幻想から解放させる生ける力である。キリスト復活の宣教は、人間および被造物を、死をもたらす諸力から解放させるところの、復活によって開かれた歴史の地平における意味深い発言である。キリストの復活は、将来に向かって開かれ、歴史に開示される出来事として理解される時、死の歴史のただ中にある生の根拠と約束なのである。そしてキリストの甦りは、死の絶滅と永遠の命の現われの開始として、全てを变革する事実である。神は全てを变革する方として、新しい世界の創造者である。復活信仰とは、それ自体で、人間が命の力へと復活することである。キリストの復活は、世界の歴史を終局史(Endgeschichte)とし、歴史の経験領域を新しい創造の期待の地平の上におく。

次にモルトマンは、人間は歴史の主体なのであるかと問う。歴史は人間の経験と決断においてのみでなく、相互的に成り立つものであり、歴史の主体は唯一ではない。人間が歴史の主体になり得たのは、近代的な支配の要求に依存していたからである。人間の歴史は、自然の歴史との相互作用において成立している。歴史が相互作用である以上、人間が歴史の主体かという問いは消失する。歴史は「神と人間」、「人間と神」との間に起こるものである。それは人間と自然との交わり、あるいは神との交わりにおける人間と自然との関係ということもできる。

さらにモルトマンによれば、歴史と自然は対立し合うものではなく、相互に依存し合い規定し合っている。人間の

精神が、身体性の中に場所をもちこれに依存しているように、人間の歴史もまた、地上の自然の条件の中に場所をもち、これに依存している。人間の歴史は包括的なものではなく、自然のエコロジカルな条件の方が、より包括的なものである。それは人類の進化を可能にしたのであり、ここでの重大な変化は、人類とその歴史を終結させるからである。だから近代の神学がこの一世紀半、復活信仰を「歴史」という枠の中で、それに対応した歴史科学を批判的に受容することにおいてのみ論議してきたのなら、それは十分ではない。もっと深く、歴史的世界を貫いて、自然における歴史のエコロジカルな諸条件を考慮しなければならぬ。近代の歴史的キリスト論は、エコロジのキリスト論に止揚されなければならない。今や歴史的——終末論的な復活信仰から、歴史的——エコロジカルな再生の神学に進んで行くべきなのである。

またモルトマンによれば、復活の意義が狭い意味で、つまり個々人の信仰の中に実存論的に、あるいは人類の希望の中に歴史的に捉えられるなら、キリスト論はこの世界の和解されない姿の中にとどまり、敵対関係の要素となりうる危険性がある。だから実存論的キリスト論と歴史的キリスト論は、宇宙的キリスト論 (eine kosmische Christologie) において初めて完成するのである。「すべてのものの和解という平和のヴィジョンにして初めて、人間の暴力行為によって傷つけられた自然が、人間の平和の歴史によっていやされる期待の地平を切り開くのである。キリストがただ単に人間との和解のため死なれたばかりでなく、すべてのほかの被造物との和解のために死なれたとすれば、すべての被造物が、神の御前に無限の価値をもち、生きる固有の権利をもつ。……『キリストは彼らのために死なれた』ということによって、人間の侵すべからざる尊い価値が、キリスト教的に基礎づけられるとすれば、このことはまたすべてのほかの生き物の尊厳の基礎づけにもあてはまり、したがって、包括的な『生への畏敬』の基礎づけにも妥当

するのである。」⁽¹⁾

これは人類という枠を越えた、大胆な、新しいキリスト論である。モルトマンは指摘していないが、ここにはアフリカの原始林において初めて「生への畏敬」を説いたアルベルト・シュヴァイツァーの精神に共通するものがある。しかし私には、モルトマンが意図的にシュヴァイツァーにふれることを避けている気がしてならない。おそらく、キリスト教の枠を越えて進んでしまったシュヴァイツァーに対して、モルトマンはあくまでキリスト教の中核にふみとどまって生態論的神学を創造しているからであろう。

モルトマンの思索は、現代世界の危機的な状況と真剣に取り組み、この中でのキリストの救いの意味を明らかにしようとしている。ヨーロッパのキリスト教世界に限ることなく、その視野を全世界、また全宇宙にまで拡げて、神学的営為を遂行せんとしている彼の態度には頭が下がる。彼の神学は、科学技術が驚異的な発展を遂げ、コンピューターが目覚ましい活躍をなし、宇宙の途方もない大きさが一層明らかにされつつあるこの時代に適応し得る、きわめて現代的な思索と言える。そして彼の神学の根本理念が「希望」ということにあるからこそ、いかなる悲劇的状況にあっても、この神学に土台をおく信仰は絶望に終わることはないのである。彼のさらなる発言に注目していきたい。次の終末論に関する思索の成果が待たれるのである。

註

(1) Molmann, Jürgen: Theologie der Hoffnung,

Kaiser, München, 1964, S. 171ff.

(1) モルトマン『希望の神学』二十世紀の神学の展望』渡部

満訳、新教出版社、一九八九年、一八九ページ。

モルトマン『希望の神学』高尾利教訳、新教出版社、一九六八年、二二五ページ以下。

- (3) Moltmann, Jürgen: Gott in der Schöpfung, Kaiser, München, 1987, S. 143.
モルトマン『創造における神』沖野政弘訳、新教出版社、一九九一年、二〇九ページ。
- (4) a. a. O. S. 149f.
同 一一一ページ。
- (5) a. a. O. S. 220.
同 三十四ページ。
- (6) Moltmann, Jürgen: Der Weg Jesu Christi, Kaiser, München, 1989, S. 262.
モルトマン『イエス・キリストの道』蓮見和男訳、新教出版社、一九九二年、三七四ページ以下。
- (7) a. a. O. S. 263.
同 三七六ページ。
- (8) a. a. O. S. 273f.
同 三九八ページ。